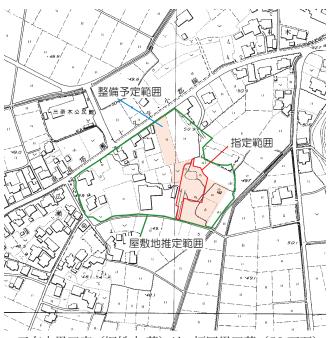
旧三奈木黒田家庭園

平成11年4月30日指定朝倉市指定文化財(名勝)

三奈木の地は佐田川流域に古くから栄えた豊かな地域です。古代の「延喜式」に載る「美奈宜神社」をはじめ、中世の「三奈木庄」、近世には英彦山街道と日田街道の交わる要衝でもあり、筑前第一の大村でした。



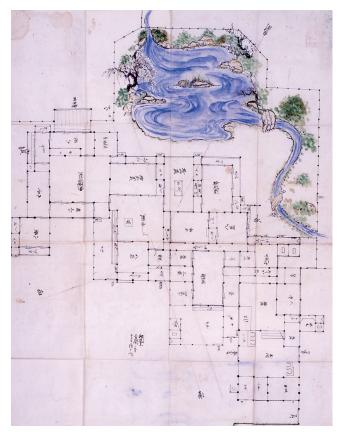
三奈木黒田家(旧姓 加藤)は、福岡黒田藩(52万石)の家老を代々勤めた家臣で、福岡黒田藩の成立当初から激動の幕末〜明治初年まで、本藩の筆頭家老(大老)として藩政をその中枢で支えた重臣です。

三奈木黒田家当主の屋敷は、福岡城内(三の丸)にありましたが、三奈木を中心とする下座郡(朝倉市南西部)に1万6千石という大きな領地を与えられ、ここに「御茶屋(別邸)」を構えて周囲に家臣団を住まわせました。この「御茶屋」には福岡藩主を迎えることも度々あり、その度に御殿や庭が改築されています。

三奈木黒田家の祖一成の父 加藤重徳は、摂津国 伊丹の戦国大名 荒木村重の家臣でした。当時播磨国の姫路城主であった 黒田官兵衛 孝高(後の如水)は、天正6年(1578)、織田信長に反旗をひるがえして伊丹の有岡城に籠城した荒木村重を救おうとして説得に行きますが、逆に捕らえられ土牢に監禁されました。加藤重徳は牢番として黒田官兵衛孝高を手厚く保護し、有岡城落城の際に、1年半もの間牢に監禁されて足の立たなくなった黒田孝高を、孝高の家臣 栗山備後 利安(「黒田二四騎」の一、後の志波 麻氐良城主、栗山大膳の父)とともに救出しました。

この重徳の功績から、その次男(幼名 玉松、後の三 左衛門 一成 美作)は黒田孝高に預けられ、孝高の息子 長政(初代福岡藩主)と兄弟のようにして育てられて、 黒田の姓を与えられました。一成は孝高・長政父子に従 い、最年少の「黒田二十四騎」の一人として戦陣を駆け、 秀吉の九州平定・朝鮮の役、また関ケ原・大坂陣・島原 陣などで活躍し、草創期の黒田家を懸命に支えました。 三奈木黒田家が代々筆頭家老として存続し、永く藩内第 一の石高を維持できたのは、孝高(如水)を助け長政と 兄弟のように育ったという藩主福岡黒田家との深い関係 によるものであり、このことは長政の遺言にも強く表明 されています。(因みに幕末の福岡勤王派家老の加藤司 書は加藤重徳の長男吉成の系譜です。)

この庭園の原型は三奈木黒田家初代の一成美作が三奈木に入部した17世紀初頭に作られ、18世紀中頃の三奈木黒田第6代一誠の三奈木での隠居に伴って改築されたものです。庭園の形式は、座敷に座って池泉を見る形(座観式)の池泉庭園で、池の北・東・西を土塀で囲み、北西の取水口から池泉へ水を入れ、池の南東から遣水を逆 S 字に流しています。池際には所々に景石を配し、池



の西と東から突き出た「出島」、中央に「中島(岩島)」などの石組を設けています。藩主を迎えることもあった 座敷からは北に古処山頂が遠望できます。樹木などその 後の変化は見られるものの、現存する江戸時代の家老庭 園として県内でも非常に貴重な庭園です。

明治以後の時代の流れの中で、広大であった屋敷は取り去られ、樹木など池泉の周辺も変化してはいますが、今なお豊かな三奈木地域の歴史を語る名勝として、黒田氏からの寄付を受け、朝倉市の文化財(名勝)に指定されています。

